

湖西線沿線の文化財の紹介

昭和49年開業の湖西線

4月から、新たに通勤や通学で湖西線を利用する方もおられるのではないのでしょうか。湖西線は、昭和6年に浜大津、今津間で開通した江若鉄道にかわり、山科から近江塩津間を結ぶ国鉄（現在のJR）として、昭和42年に着工され、昭和49年7月に開業されました。

この高島市から大津市にかけて、琵琶湖と比良山系に挟まれた平野部を縦走する湖西線沿線には多くの遺跡が存在します。湖西線の開業時の昭和40年代には、宅地開発や別荘地の造成が相次ぎ、それに伴い多くの遺跡が確認されました。

市内では、安曇川駅前整備に伴

う南市東遺跡の発掘調査では、弥生時代や古墳時代の住居跡が発掘され、古墳時代の土器からは、朝鮮半島との交流がうかがえます。また、新旭駅舎建設に伴う堀川遺跡の発掘調査では、古墳時代の集落跡や平安時代の建物跡が発掘されたほか、市内丘陵地の別荘地では、多くの古墳群の確認調査などが行われました。

沿線文化財の展示紹介

これらの調査された遺跡を今に伝える展示スペースが、JR大津京駅構内に設けられています。この展示スペースでは、これまで大津宮や大津市エリアの湖西線各駅の文化財紹介が行われてきました



市内の駅マップ

が、今年2月から、高島市エリアの文化財の展示紹介が行われています。これから3年をかけて、近江高島駅をスタートに、安曇川駅、新旭駅、近江今津駅、近江中庄駅、マキノ駅と湖西線を北上しながら、各駅周辺の遺跡および文化財の展示紹介が行われます。

現在、その第1弾として、

5月末まで近江高島駅周辺の遺跡、文化財の展示紹介が行われています。展示内容は、近年発掘調査が行われ、織田信長や安土城との関連性や、明智光秀が設計（縄張り）したと伝わる、大溝城跡の調査成果や出土瓦（軒丸瓦・軒平瓦）のほか、今年開藩400年という節目を迎える大溝藩の関連文化財として、大溝藩の5基の曳山模型などが祭の紹介とあわせて展示されています。

特に、今年400年を迎える大溝藩では、5月3日（宵宮）から4日（例大祭）にかけて記念イベントが行われることから、湖西線を利用した誘客が期待されます。高島の遺跡、文化財を改めて皆さん



んに認識していただける機会です。これからの展示にご期待ください。

図文化財課

☎ (32) 4467

編集感

4月は身の回りが色々に変化する月ですね。P6でも紹介していますが、市役所では4月に各部署の引っ越しが行われますので、それ以降に市役所に来られる際はご注意ください。また、4月といえば、何も分からない広報の部署へ私がやってきたのは3年前でした。それからは、毎月の締め切りに追われながらの広報誌作成や、ホームページ・SNSによる情報発信などを行っています。少しでも「最近市役所の情報が身近になったなあ」と感じる人が増えてきていると嬉しいです。（H）

お詫びと訂正

広報たかしま3月号の歴史散歩に次の誤りがありました。訂正のうえ心からお詫びいたします。

4段目の滋賀県知事の氏名（誤）中川 弘 → （正）中井 弘



広報たかしま

平成31年

4

月号

No.231

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒505-0801 滋賀県高島市新旭町北畑5-5番地

☎ 0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ t-info@city.takashima.lg.jp

今津宿と今津浦

交通の要衝 今津宿

今津宿は天川の橋のある現今津町南浜から北浜にかけて築かれた宿駅です。江戸時代末期の今津を描いた「今津図」を見ると琵琶湖に浮く島のような地域の中に形成された宿駅であったことがわかります。この地は北国街道（西近江路）が縦断し、今津浦があったことから、水陸両面で交通の要衝となっていました。このため、多くの物資が集まり、荷物の管理を行う荷問屋のほか、人馬で輸送業者を中継する施設である駅問屋



も置かれていました。文政6年（1823）の記録には荷問屋が9軒あり、そのうち一軒を問屋としていたことが記されています。現在でも当時の面影を残す建築物や湖岸に築かれた石垣を見ることができます。

今津浦の面影

今津浦には、小浜や敦賀から多くの物資が運ばれました。今津浦はこれらの物資を湖上運輸によって大津へと輸送する中継地点であり、重要な港として運営されていました。琵琶湖上には、大津を含め、湖東の長浜や彦根、八幡への航路も整備され、今津浦から物資の運搬が行われていました。慶安2年（1649）の記録によると、今津浦には少なくとも52艘の船があり、103人の水夫を保有していたことから、大規模な港であったことがうかがえます。今津浦には住吉神社をはじめ複数の神社のほか、金沢藩今津代官所が置かれていました。今津浦の湖岸に



今津の石垣

は、周辺に築かれた石垣が見られます。この石垣は金沢藩が巡見使の巡国に備えて築いたとされ、約950mの長さがあります。近代まで、防波堤としての役割を担っていました。代官所周辺の石は比較的大きなものが積み、浜辺に突出した部分があることから、今津浦の船場の痕跡であると考えられ、当時の面影を今に伝えています。

図文化財課

☎ (25) 8559

新しく天然記念物に指定 「白谷の夫婦椿」

平成31年3月20日、高島市教育委員会は「白谷の夫婦椿」を高島市の天然記念物に指定することを決定しました。「白谷の夫婦椿」は、マキノ町白谷の白谷荘歴史民俗博物館駐車場に隣接する場所にあるヤブツバキで、約2mの間隔で2本が並んでいます。県下では最大、全国的にも巨樹の一つであると考えられています。天然記念物の指定は、高島市成立以降は初めてとなります。



夫婦椿

編集 雑感

皆さん、広報たかしま6月号はいかがでしたか？ペーロン大会やトライアスロンの記事を見ると、夏がもうすぐそこまで来ている気がします。でも、その前には、ジメジメとした梅雨がやってきます。

6月は土砂災害防止月間。「日頃の備え」と、もしもの時は「早めの避難」を心がけて、安全に梅雨の時期を乗り越えましょう。季節の変わり目は、体調もくずしやすいものです。体のメンテナンスもお忘れなく！（YK）



広報たかしま

令和元年

6

月号
No.233

発行▼高島市
編集▼政策部企画広報課

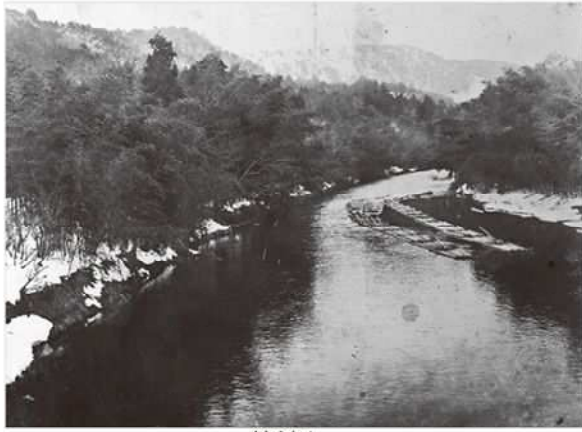
〒920-1502 滋賀県高島市新旭町北畑5-5-5番地

☎ 0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp

都市経済を支えた朽木材

朽木の木材生産

京都や奈良といった都の近くに位置する近江では、古くから都の寺院などの大型建物の造営・維持に必要な木材を切り出すために開発された山（杣）が多く存在しました。また「正倉院文書」において、東大寺の造営を担当する造東大寺司が用材の伐採基地として各地の杣に山作所を設置していたことがわかっており、一説ではその



筏流し

一つが朽木小川にあったのではないかと考えられています。

朽木で切り出された木材は、安曇川の水運を利用して湖岸に運び、琵琶湖上を輸送されました。そのため、江戸時代には安曇川河口の舟木（安曇川町南船木付近）で材木屋が座を形成しており、木材を切り出したり筏で運搬する人々の支配権や朽木材の直売権を独占していました。こうして、安曇川を利用し、筏で運搬された朽木材は、19世紀半ばには二条城の修築用材や瀬田の唐橋用材などに活用され、昭和まで朽木の代表的な生産業として受け継がれていきました。

朽木炭の生産

朽木では、その豊かな山林資源をいかした木炭の生産も盛んに行われました。江戸時代に入ると、より質の良い炭を作るため、朽木の木炭生産は次第に朽木氏や御用問屋によって管理されるよう

炭切手 柴口

(裏)

(表)

表書之通無相違可決
相渡者也
日附中

表三興安年
炭壹千也
代錢拾文
相渡仁右衛門
木屋助右衛門
相渡伊右衛門

路が不可欠で、その条件を満たしていたのが高島でした。とくに朽木は、舟木や大溝からの湖上水運の便にも恵まれていたため、朽木の木材生産業は、都市のエネルギー供給を支え、長い間地域経済を支えていました。

図文化財課

(25) 8559

になっていき、幕末には「炭切手」という紙幣も発行していました。木炭については、朽木に炭焼きを伝えたとされている村井と椋川の2か村が運上金の徴収や製造の許可を出す権限を持っており、14か村が製造を許されていました。ここで製造された木炭は、木材と同様に水運などを利用して都市部へ供給されました。現在でも、朽木の山には石が積まれた窪みが多数見られ、当時の炭焼き窯の痕跡を確認することができます。

木材や木炭の生産には、山林資源が豊富であることだけでなく、消費地である都市部までの販

編集感

最近、天気予報の精度が向上し、昔と違い天気予報は当たるものになったなとつくづく感じます。台風や大雨の予報は、当たるとうれしくはありませんが、情報を得て、備えることで、被害を少なくすることができます。

今月号の特集は「防災対策」でした。広報誌が情報源の一つとして活用され、特集記事をもとに、一人でも多くの方が災害に備えて行動を起こしていただければいいと思います。

さあ、私は食料の「ローリングストック」から取りかかろうっと！ (YK)



広報たかしま

令和元年

9

月号 No.236

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒570-1156 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

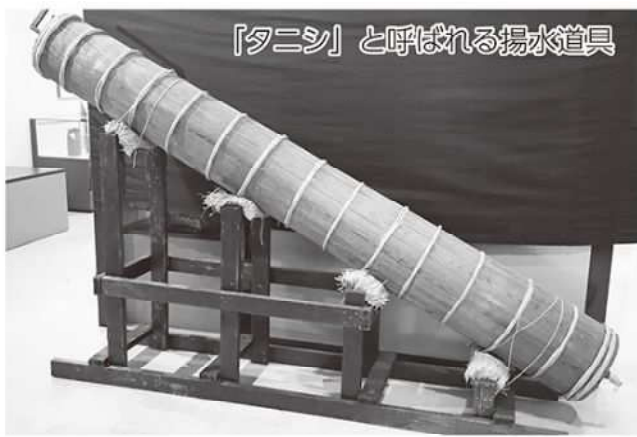
☎ 0740(25) 8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

高島のくらしと民具

内湖で使われた揚水道具

乙女ヶ池に面する打下区では、内湖から水を揚げるために、「タニシ」または「サザエ」と呼ばれる木製の道具が用いられてきました。これは一般的には竜尾車と呼ばれる民具で、長さ約4m、直径約35cmの桶状の筒内側が、らせん状になったものです。これを回して低い水面から、より高い耕地へ



「タニシ」と呼ばれる揚水道具

と水を揚げるポンプとして利用されていました。打下区では、その形態から「タニシ」と呼ばれることが多かったと伝わり、昭和30年代までは、乙女ヶ池の沿岸の複数の家で使われていました。

起源と伝来

竜尾車の技術は、西洋の「アルキメデスポンプ」を起源とし、室町時代末期に日本へ伝わったとされています。農業用の道具としては、近畿の一部で使用されただけで、全国的に普及することはありませんでした。その竜尾車の初期導入地の一つが高島郡（現高島市）で、市内に複数存在した内湖の沿岸で用いられていたといわれています。

滋賀県内では、堅田で製造が始まり、江戸時代末頃に、高島郡マキノ町の桶屋がその技術を習得し、海津で製作が始められたといわれています。

高島民具クラブが昭和50年代

に打下区で行った聞き取りでは、「タニシ」を実際に使ったことのある、明治35年生まれの人が回答をしています。それによると「タニシ」は他の揚水道具よりも早く水揚げができる便利な道具で、約3000回まわすと一反（約1000m）の水田に水が揚がりました。また、これを回転させるのは学校帰りの子どもの仕事だったということです。

その他の揚水道具

打下区では、「タニシ」の他に「ジユウゴシ」または「竜骨車」と呼ばれる揚水道具も使われていました。これは、近江八幡で多く使われていたことから、恐らく近江八幡で購入して、使われていたものと考えられています。

こうした、今では見ることもない高島の昔のくらしを伝える貴重な民具を紹介する特別展を開催します。皆さん、ぜひご来場ください。

関文化財課 ☎ (25) 85559

●秋季特別展「高島のくらしと民具」

会場 | 藤樹の里文化芸術会館 展示室1
期間 | 10月31日(木)～11月10日(日)
※11月5日(火)は休館
時間 | 9時～16時30分(最終日は15時30分まで)

◆特別展関連体験講座

はた織り体験&スカリ(紐編み運搬具)作り

日時 | 11月2日(土) 13時30分～16時
講師 | 辻川 智代さん(琵琶湖博物館特別研究員)
参加費 | 200円(材料費)



スカリ

編集 雑感

10月は市内でたくさんのイベントが開催されます。

なかでも、ピックランドを主会場に開催される「びわ湖高島栗マラソン」は、撮り応え十分なスポーツイベントです！広角レンズで豊かな自然の中を疾走するランナーを撮るもよし、望遠レンズで快走するランナーたちの表情を撮るもよしと無限にイメージが膨らみます！

当日「高島市」の腕章をしたカメラ職員を見かけたら、全力でお気に入りのポーズをお願いしますね♪(YO)



広報たかしま

令和元年

10

月号
No.237

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒520-0159 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740(25) 80004
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ info@city.takashima.lg.jp

市内の登録有形文化財

登録有形文化財

登録有形文化財とは平成8年の文化財保護法の改正によってできた文化財の一つです。従来の文化財保護法では、意匠・技術・歴史・学術的に優れたものを重要文化財や史跡・名勝などに指定し、その保護を図ってきました。指定を受けた文化財はその価値を守っていただくための規制がかけられますが、それだけでは数多くある文化財を守りきれないため、緩やかな規制で活用を図りながら文化財を守っていくとするのが登録制度です。登録有形文化財は、建物等が文化庁の登録原簿に登録されるという形をとり、外観が保たれることを大切に、内部の改装などは容易に行うことができるため、さまざまな活用が可能となります。

多様な活用方法

市内にも登録有形文化財がありさまざまな方法で活用されています。



びれっじ2号館 (外観)

るので紹介します。マキノ町白谷にある白谷荘歴史民俗博物館は、江戸時代後期の建築と推定される民家で、地域で収集された教科書類・民具資料を展示する資料館として活用されています。また勝野のびれっじ2号館は、江戸時代中期の建築と推定される福井三四郎家住宅で今は商業施設として活用されています。今津町の辻川通りには銀行・教会・郵便局の三つのヴォーリス建築が登録されています。



びれっじ2号館 (内部)

ています。

市内には11件の登録有形文化財があり、建物本来の目的で使用されているもの、地域の憩いの場・展示施設・商業施設として活用されているものなどさまざまな方法で文化財が継承されています。

登録を証明するプレート

登録有形文化財にはその登録を証明するプレートが交付されます。登録プレートは建物によって入口など見えやすい位置に設置

しているものもありますので、前段で紹介した施設を訪れた際には見つけてみてはいかがでしょうか？

また、登録有形文化財は平成30年度末で全国各地に12,000件以上あり、宿泊施設、商業施設として活用されているものも多くあり、趣のある建物だと思ったら登録プレートが見つけられるかもしれません。



登録プレート

問文化財課 ☎ (25) 8559

編集感

表紙で紹介した『冬山開き』では、思いっきり雪で遊ぶ子どもたちがとってもかわいくて、楽しそうで、私も遊びに混ざってほしい気持ちになりました！

年末年始は雪も積もることなく、過ごしやすい2020年の始まりとなり安心でした。ですが、ウィンタースポーツ大好きな私はやっぱり雪が恋しい～！これは、雪山に行くしかない！

市内には目的に合わせて選べる4つのスキー場があります。とっても贅沢ですね！今年はどこへ行こうか、わくわくしながら検討中です！(YH)



広報たかしま

令和2年

2

月号

No.241

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課
〒520-1562 滋賀県高島市新旭町北畑5-6-5番地

☎ 0740 (25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ info@city.takashima.lg.jp

天台宗寺院 長法寺跡

高島七力寺の長法寺

天台宗は、平安時代に比叡山延暦寺を開いた最澄が唐から伝えた仏教の宗派で、当時の高島でもその教えが広まり、天台宗寺院が建立されていったと考えられます。その主な寺院は「高島七力寺」と呼ばれ、長法寺はその一つに数えられています。勝野にある日吉神社が、嘉祥2年(849)に長法寺を護る神を祀る神社として建立されていることから、長法寺の歴史は平安時代前期までさかのぼることができます。



長法寺跡に残る寺院遺構

その長法寺は、鵜川の長宝寺山の山中にあり、高島七力寺の中で唯一その所在が確認できている寺院跡です。昭和30年代に行われた調査でその規模と構造が明らかになりました。長宝寺山の南北に延びる尾根上には本堂跡、僧坊跡、鐘楼跡が順に並んでいます。本堂は礎石の配置から約17m×11mの大きさであったと推定され、本尊の台座に使われていたと考えられる石も残っています。本尊は、音羽にある長谷寺に安置されていた



僧坊跡の石積

薬師如来坐像(国重要文化財)とされ、長法寺が火災に見舞われた際に運び出されたと伝わっています。本堂周辺では、瓦が見つかっていないことから建物は瓦葺ではなく柿葺きであったと考えられます。本堂の南には石段があり僧坊跡へと続いています。僧坊跡は、斜面を利用し三段程度で構成され南北に細長く配置されています。ほかに庭園遺構や石塔の部材などが確認されています。約250m四方にわたる範囲を持った長法寺ですが、いつどのようにに廃絶したかは明らかではありません。

長法寺跡に残る城郭遺構

室町時代後期になると有力者たちは平地の居館とは別に有事に備えた山城を築いていきます。山城は山岳寺院を利用することがあり、市内の山岳寺院も城郭化されているところがあります。長法寺跡の東側の一部には、土塁や堀切など城郭の防御施設と考えられる遺構が確認されています。これらの遺構から長法寺そのものが城郭化されたと言い切ることはできませんが、その周辺を長法寺跡と区別して長法寺城跡と呼んでいます。



石塔の基壇

す。また、この長法寺城跡は、すぐ北側にある打下城の関連遺構とも考えられています。

長法寺跡に残る遺構からは、当時の僧たちの信仰と生活のようす、また戦国期の争乱の緊迫したようすを垣間見ることができます。

文化財課 (25) 8559

編集 雑感

蒸し暑い日が続きますが皆さんいかがお過ごしでしょうか。『みんなで575』コーナーでは毎月たくさんのご応募をいただき本当にありがとうございます。

575という限られた文字数で、さまざまな表現がされていていつも楽しく拝見しています。

さらに今月は、本庄小学校から届いた夏らしくてかわいらしい575を紹介させていただきました♪

世代を超えて楽しめる言葉遊び、皆さんのご応募をお待ちしています!(Y.H)



広報たかしま

令和2年

8

月号

No.247

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒520-0155 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp

高島市の聖徳太子信仰

鎌倉時代以降、仏教の広がりとともにさまざまな功績を残した聖徳太子を崇敬する信仰が盛んになり、それに伴って、太子の生涯を絵巻物で表した「絵伝」が多く作成されました。今回は高島市に伝わる聖徳太子絵伝をご紹介します。

安曇川町中野に伝わる聖徳太子絵伝は、室町時代に作成されたもので、『聖徳太子伝暦』をもとに聖徳太子の生涯が年代順に描かれています。第一幅は「托胎

霊夢」と呼ばれる生誕から13歳までの幼少期、第二幅では排仏派の物部氏との合戦を中心に描かれた

14歳から22歳、第三幅には23歳から37歳までの三宝興隆の詔・富士登山・新羅征伐・勝鬘経講賛などの説話が描かれています。そして、第四幅には38歳から葬送に至るまでが描かれ、最後の場面（第四幅右下）では、『伝暦』の内容とは関係のない太山寺創建のよう

すが描かれています。太山寺は、安曇川流域の阿弥陀山中腹に存在した、高島七ヶ寺の一つに数えられる天台寺院で、中野に伝わる絵

伝の旧所蔵者とされています。このように、絵伝の中に所蔵寺院の開基伝承を付加することは、その寺の権威を高めるだけでなく、在地の民衆に対して、より身近に感じさせる効果があったと考えられています。

なお、同じく中野に伝わったほぼ同時期の善光寺如来絵伝にも、仏教の日本伝来とともに聖徳太子の活躍が描かれています。

写真・聖徳太子絵伝 市指定文化財 龍谷大学龍谷ミュージアム寄託

岡文化財課 ☎(25)85559

第一幅



第三幅



第二幅



第四幅



湖北と高島を結んだ道

湖北と高島を結んだ道

古くから高島市域には西近江路や九里半街道などの日本海と都をつなぐ主要な街道があり、活発に人や荷が行き来していました。一方、湖北と高島を結ぶ道には海津大崎を通るルートと万路越まんじくえを行く2つのルートがありました。海津大崎ルートは岩場が多く難所続きであったため、かつてはマキノ町小荒路からの万路越ルートが一般的でした。

峠道・万路越

万路越ルートは、マキノ町小荒路と長浜市西浅井町黒山の間の峠道です。古くから湖北と高島を結ぶ重要な道であったことから、道の補修が度々行われていました。江戸時代には幕府の役人が視察をする際に補修を行うように小荒路村に指令を出していた記録が残っています。

また、明治政府は道路を国道・県道・里道に分け、万路越ルートは西浅井道として里道でありながら県費で管理されることになり、

大正時代の道路法改正では海津木之本線として県道へと格上げされています。



おおさきずいどう 大崎隧道 (トンネル)の 開通

昭和に入ると、地元住民の願い



大崎隧道（開通当時のようす）

もあつて難所が多く危険な道とされていた海津大崎ルートにトンネルを掘って道路を建設しようとする動きが起きます。昭和10（1935）年1月から工事が始まり昭和11（1936）年6月に5つのトンネルが完成しました。大崎トンネルが開通したことによって、これまで通行することのなかった自動車やバスが通るようになり、湖周道路としての利便性は飛躍的に向上しました。この道は昭和62年（1987）に奥琵琶トンネルが開通するまでは国道303号として湖北と高島を結ぶ主要道でした。

なお大崎トンネルの工事中から開通直後頃にかけて道路工事関係



海津大崎の桜（平成31年のようす）

者の手によって植えられた桜は、今では湖岸に沿って美しい桜並木が続く「海津大崎の桜」として知られ、高島を代表する観光名所の一つとなっています。

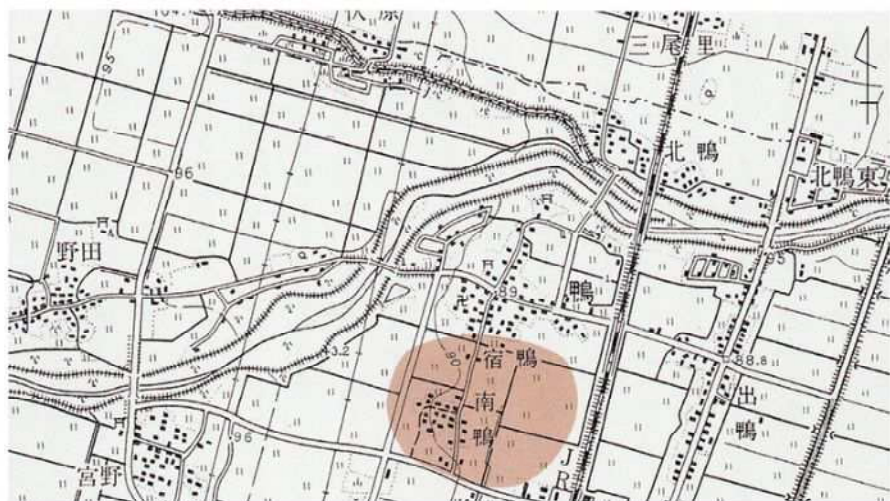
問文化財課 ☎（25）85559

鴨遺跡出土の荷札木簡

古代役所跡の推定地

高島市鴨（宿鴨・南鴨）集落からJR湖西線にかけて分布する鴨遺跡は、平安時代前期（8～9世紀）の地方役所跡とされる「高島郡衙」の有力な推定地のひとつです。

この鴨遺跡では、昭和54年に県



▶鴨遺跡中心地の位置図

営ほ場整備事業に伴い発掘調査が実施され、平安時代前期を中心とする遺物が多く発見されました。調査された範囲は、地下の水位が高いことから、本来では残ることが少ない、下駄やしゃもじ、箸、曲物容器、櫛などの木製の日常用品の他、斎串と呼ばれる祭祀に関わる木製の遺物が多く出土しています。この木製品の中で特に注目される遺物に「木簡」があります。

出土した荷札木簡

鴨遺跡からは、「遠敷郡遠敷郷小丹里秦人足嶋庸米六斗」と書かれた木簡（長さ16cm）が出土しました。

木簡は、短冊状の木板に墨で文字を書いたものです。書き間違った時や書き換えの場合に、その箇所を薄く削り書き直しができるところから、当時貴重であった紙の代用として使用されていました。

平城京跡からは、荷札と考えられる木簡が多く出土していることから、鴨遺跡出土木簡も、遠敷郡（現在の福井県小浜市を中心とす



遠敷郡 遠敷郷小丹里
秦人足嶋庸米六斗

る地域）から、税として米を送ったことを記した荷札と考えられています。

この木簡に書かれた「庸」とは、京や畿内以外の人々が都での労役の代わりに布や米を納めるもので、都で働く人々の食料等に充てられていました。米の場合、一人あたりの支給量は1日2升（20合）とされ、当時の暦で30日ある月は六斗（600合）、29日の月は五斗八升（580合）が支給されていました。この支給量に合わせて荷造りの段階で、六斗ないし五斗八升の荷札木簡が使われていたことが分かります。

鴨遺跡の役割

鴨遺跡で出土した木簡は、若狭から京へ運ばれる途中で外されたものか落ちたものかの判断はできませんが、北陸や若狭方面からの

物資が、鴨遺跡を経由して運ばれていたことを物語る資料です。

鴨遺跡は、高島平野を南北に通過する古代の北陸道に沿って立地し、古代の港である勝野津とも近接することから、陸路と湖上路の両面を掌握する役目を担っていたものと考えられています。

関文化財課 ☎ (25) 85559

鴨遺跡出土の荷札木簡
（高島歴史民俗資料館で
展示中）

文学作品にみる「あらち」

マキノ町小荒路から福井県敦賀市^{ひきた}足田にいたるルートは、古くから北陸道（北国街道）の一部として知られており、「あらち」はこのルート一帯で使われた地名であると考えられています。この一帯は古くから積雪の多さや道の険しさから難所として知られており、この地を通った人々のさまざまな思いを、和歌や軍記物語の中からうかがい知ることができます。

和歌の中の「あらち」

この「あらち」の情景を詠んだ



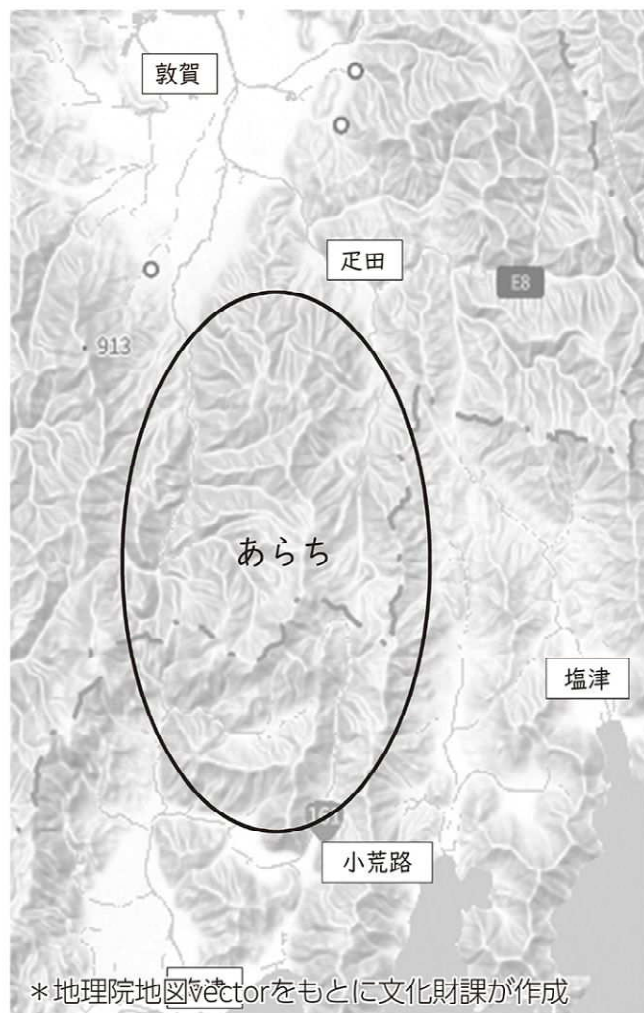
小荒路から「あらち」を望む

と考えられる和歌は多く、その数は数百にのぼるといわれています。中でも、鎌倉時代にまとめられた私選和歌集『夫木和歌集』にある「あらち山 雪げの空になりぬれば かいつの里に みぞれふりつつ」は、越前国の役人藤原仲実^{なかつね}が詠んだものです。「あらち」や「かいつ」といった地名から、歌はこの一帯を通った時に詠んだものであることがわかります。その他にも雪景色や雪の多さ、険しさなどを詠んだものは多く、今も変わらない雪路の厳しさなど自然の情景を感じることができます。

軍記物語の中の「あらち」

平安末期から室町時代にかけての争乱を題材にした軍記物語の中にも「あらち」を通じて戦場へ向かうようすが分かるものがあります。『平家物語』や『源平盛衰記』によると、源頼朝の鎌倉挙兵に呼応した木曾義仲^{きそよしなか}を討つために京を出て北陸に向かう平氏10万の兵がこの一帯を通ったとされています。

また源義経^{よしかつね}の幼少期と京を追わ



*地理院地図^{vector}をもとに文化財課が作成

「あらち」周辺図

れ東北へと逃れる北国落ちを描いた『義経記』の「一節『愛発山』の事」には、義経たちが「あらち」の語源について語り合う場面が出てきます。義経は、昔は「あらしの山中」といったが、道が険しく血を流すところから「荒路・荒血」になったといい、弁慶は険しい山はどこも一緒であり、ここで出産があったことから「新血・荒血」というのだと義経に説明します。

ほかに「あらち」は、その一帯の山のかたちを指して「有乳」や険しい道を指して「荒路」「荒道」と表現されていたりもします。また古代に近江と越前の国境にあったとされる関は「愛

発」と表現されるなど、「あらち」のさまざまな漢字から、この地名に対する当時の人々の思いをうかがい知ることができます。

文化財課



(25) 8559